

同じタイトルで寄稿してから1年余り経つ、林住を自覚しながら生臭さが抜けない老爺の戯言とご理解を乞う。

- ① 226 事件： 旧海軍の極秘資料が出てきてわかった近代日本最大クーデターの意外な事実を今夜のNHKスペシャルで知った。海軍の陸戦隊が動いて市街戦から内戦にもなりかねない事態だったとは考えもしなかった。なぜ83年も表に出なかったのか、現今の政治資料の扱いに思いが及ぶ。番組は終りに、226の(軍部にとっての)成果?が僅か数年後の太平洋戦争開戦に繋がったという。515に続く226は日本社会が未熟だったとしても犠牲が大きすぎた。(8月15日記)
- ② 気象異変： 記録的な強い台風10号が西日本を縦断した。暴風雨の力をどこまで想定するかは限がない。今こそ先進国が省エネ、省温暖化ガス排出を徹底しなければならないのに、エアコン使い放題、高級マイカーが街に溢れる、空ではLccといえども巨大な塊を飛ばすエネルギーがバカにならない。更に最大で無用な温暖化要因は軍事関連である。相手を恐れて軍備拡張と基地建設、演習の愚を政治家は考えなければならない。艦船の燃料消費は速力の3乗に比例するという。
- ③ 生物多様性： 赤磐市野生動植物調査会の端くれに参加しているが、門外漢に興味深い話題があるからだ。例えば近くのふれあい公園で水面を埋めていた蓮が3年前に無くなった謎が解けた。プロジェクトの投影で初めて見る鮮やかなミシシippアカミミガメが蓮の実を食い尽くしたからだ。耳の真っ赤な筋に魅かれて飼ったペットを池に放したに違いない。 <生物多様性>入門 鷲谷いづみ著 岩波ブックレット の始めに述べているのは、セイタカアワダチソウと並ぶ、動物界の外来種の代表格なのか。「昆虫の擬態」は小さな生き物の知恵を感じておもしろい。
当市は大学教授OBなど専門家が多いためか、県の要請を受けて上記調査会がある。9月には講演会「養老孟司が語るこれからの里山」が県自然保護センター主催で開かれる、またとない機会なので参加申込みをした。
- ④ 火の鳥： めったに連載小説を読まない私が、4月から始まった朝日・毎土曜の“火の鳥”に魅かれている。手塚治虫原作、桜庭一樹作で関東軍が中国大陸を舞台に展開する物語。47歳の女性作家が三十何年か前に小学校図書室で読んだ原作が下敷きになっている。挿絵も物語に見合うスケールで美術館で見ているような気分になる。大地編に続く展開が楽しみである。
ショットンがフィクションを教えてくれなかったのは当然としても、先生の人柄が生徒に植え付けた中国のイメージは無視できないのでなかろうか。ご存命なら読後感を伺いたいものだ。
原作者が<火の鳥>に幻のエネルギー原子力を夢想したとも思わせる壮大な話である。
- ⑤ ぼけてはならぬ： かつて親しくしていた近所の同輩が徘徊老人になっている。A紙の記者歴もあるのに、PCやネットと無縁、突然訪ねて来ては幻想を語るのに対応に苦慮している。
別の一人は ジャンボ機のパイロットを長年務め、このHPにも投稿している高津同級生のA君。九州をレンタカーで1週間ばかり旅した親しい仲だったが、施設に入ったまま。数年前に訪ねたときは訪問者の認識もおぼつかなかった、夫人から訪問の遠慮を云われたのでそのまま無音にしているが侘しい。ベテラン機長は燃費を稼ぐために搭載燃料を減らして飛ぶので、予定空港に着陸できないとき別空港まで残り燃料で行けるか厳しい判断を強いられる、機体と乗客を預かる責任の重さからくるストレスは地上人に想像

できない。ベトナム戦争のときは高空から艦砲射撃を見物したなど彼ならではの話もあった。だが、親友も話が通じなければどうしようもない。

当市広報誌は長寿を祝う記事が定番だが、ただ生きてるだけを祝う風潮に疑問をもつ。

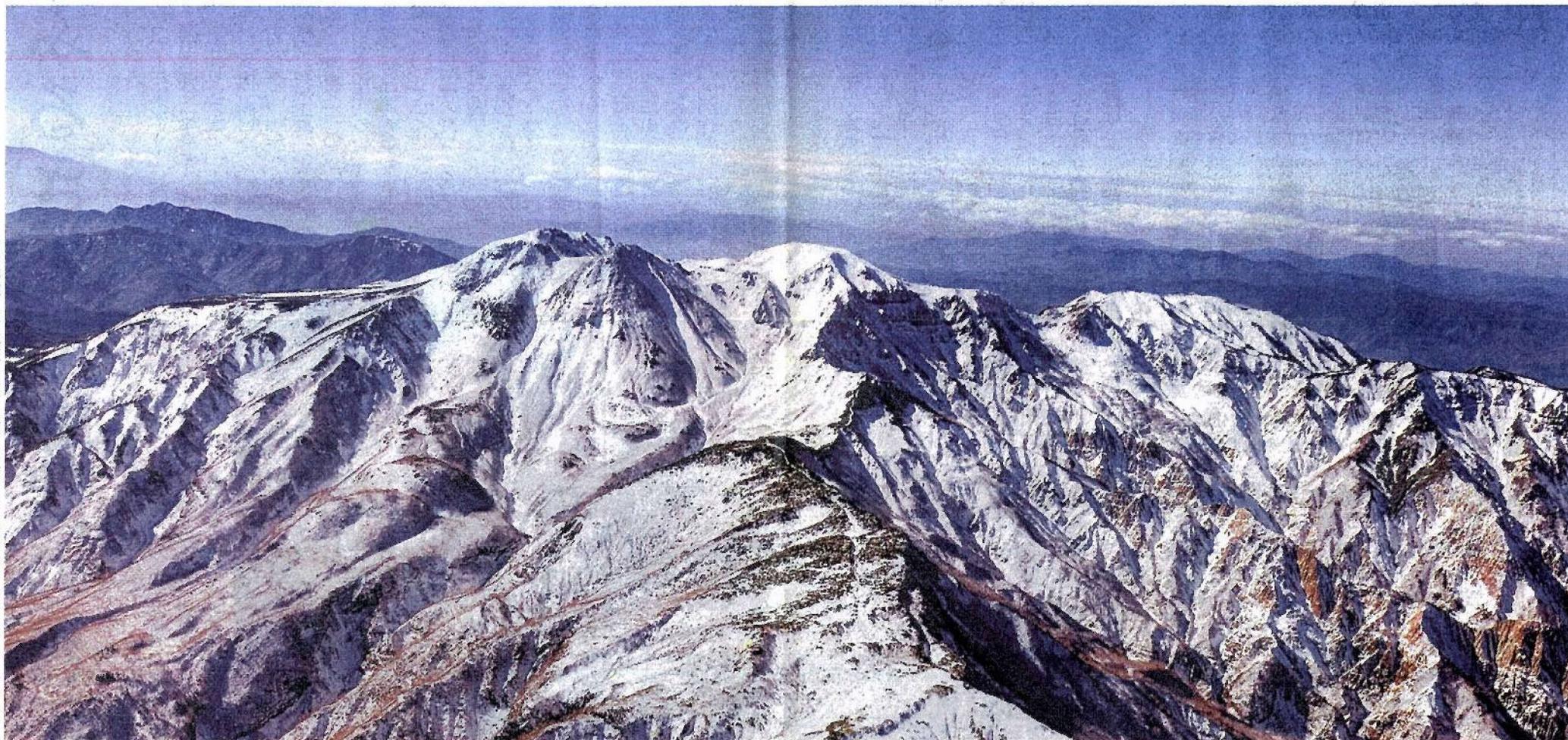
- ⑥ 深田久弥： 山が好きな多くの方は名著「日本百名山」を知っている。NHKのBSp番組「日本百名山」も深田が選んだ100の山々に依っているはずだ。今夜TVで“早池峰山”を観たあと、書棚からこの本を取り出したところ、11年前に切り抜いた新聞記事が挟んであった。何気なしに読んでみて知ったのは、深田が作家としてのデビューがままならず、雌伏後に好きな山旅から編み上げたのがこの作品であること。更に、深田が若いとき巡り合った二人の女性との羨ましいロマン、感動をお裾分けするため、末尾に記事のコピーを添付する。面倒でも赤の①から⑤を継ぎ合せてご一読を。(8月26日記)
- ⑦ ニュース7： 目白押しの台風がトップでなくなったら大雨情報が連日である。交通事故や凶悪犯罪を深掘りしてほしくないが、内外の政治ニュースも明るいとは言えない。米中、イラン、朝鮮半島を巡る情勢、EUの複雑さ、数え上げれば限がないが、アフリカのことはまだ好感が持てる。G7で共同宣言を見送るとは何のためのサミットか。核兵器が人類の破滅をもたらすと分ってながら止められない首脳たち、目先の関税で争う狭い視野、言い出せば限がない。人間の性^{まが}といえればそれまでだが、それでは済まないことである。気休めは地方局の明るく楽しいニュースだ。
- ・遠くても大きいグリーンランドの買収発言、聞きなれないGSOMIAは隣国のことであっても穏やかでない。
 - ・EU離脱に絡んで英国メイ首相の端正な姿を見なくなったのはちょっと淋しい。
 - ・大統領側近が次々にすげ代わるのは見苦しいが、我国での長続きはそろそろ、気分一新を。

親しい仲間が逝くと「我も行かん はや老いたれば 遥かに我をよぶ オールドブラックジョー」を口ずさむ昨今、思いつきを並べただけの支離滅裂、厚顔無恥の拙文をお許しいただきたい。(終)

愛の旅人

偶然の再会が生んだ名著

石川・大聖寺、白山



①

A ↓

白山が薄く雪化粧した。里から真っ白な姿が望めるのも、もうすぐだ!!



「日本百名山」

深田久弥と志げ子

2

雲上のかなたは、びょうぶのように連なる荘厳なパノラマだった。北東から南側へ展望をめぐるすと、御岳、立山、槍ヶ岳、穂高岳、乗鞍岳、御岳と北アルプスの山々がくっきり見える。金沢市から来た63歳の男性に「コーヒーをどうぞ」になりながら、心地よい疲労と達成感に浸った。

深田久弥の「日本百名山」に87番目に登場する白山は、「仰いで美しいばかりでなく、登っても美しい山」だと書かれている。私は、百名山では初級の山を六つしか登ったことのない初心者だが、秋晴れの一日、中級に分類されるこの山を思い切って登ってみた。午前7時20分、南麓の別当出合(石川県白山市)。「霊峰白山登拝道」とある標柱わきの鳥居をくぐって出発した。室堂平に出ると、宿泊棟は2週間前に営業を終え、既に冬支度。道理で下りてくる人には出会わなかった。登り始めて3時間半、最高峰の御前峰(2702m)に立つことができた。

近年の登山ブーム、特に中高年が山を目指す背景に、1964(昭和39)年出版の「日本百名山」(新潮社)がある。深田がすべて頂を極めた山の中からえりすぐった百山だ。選定基準は「品格」「歴史」「個性」。山高きをもって尊しとせずだが」と断りながら、標高1500m以上も一応の基準とする。一山につき原稿用紙5枚、それ以上は「だれるから」と嫌った——簡にして要を得た山岳随想を集めた古典的名著である。

深田は東京帝大在学中の27(昭和2)年、24歳で改造社に採用された。翌年、懸賞小説に応募してきた北島八穂という女性に心ひかれる。青森生まれの八穂は青森高女から実践女学校(現実践女子大)を中退。青森県内で代用教員をしていたが、脊椎力エスが悪化して退職し、自宅でふせていた。深田が手紙を出して青森まで会いに行ったのをきっかけに、11年間の同居生活の末、40年に正式に結婚する。

深田の初恋は、20歳の時だった。ある秋の日、一高生の深田は東京・本郷通りで、聡明そうな一少女に目をとめ



る。菊と蘭の記章がついた焦げ茶色のバンドを締めた、東京女子高等師範付属高女(現お茶の水女子大付属高)の女子学生。通りですれ違うたびにひかれていったが、それだけだった。

運命のいたすらのような再会は、18年後の41年——深田がようやく八穂と結婚した翌年のことだった。文芸評論家の中村光夫(本名・木庭一郎)の結婚披露宴の席。かの女学生の名前は木庭志げ子といい、中村の姉だったのである。深田は、志げ子と初めて言葉を交わしたこの時のことを、「わが青春記」(52年)で「一高時代の私の風貌を彼女は細かな点までおぼえていた。まことにこの世は偶然なものである」と回想し、こう記している。

「この偶然が私の後半生を支配するようになる」とは——

文・小西淳一
写真・永曾康仁



もうすぐだ——岐阜県側上空で、本社へりから

C

C

3

ふるさとで雌伏の8年

北畠八穂と知り合って1年後の1929(昭和4)年、深田久弥は「津軽の野づら」を発表。「オロッコの娘」が文芸春秋で採用され、文壇で注目される。32年には「あすなろう」。翌年には神奈川・鎌倉へ移り、久米正雄、今日出海、小林秀雄ら「鎌倉文士」の仲間入りをした。互いの家に入りました。文士仲間「深田の作品には八穂が関与している」と薄々感づいていく。

35年、深田は小説集「津軽の野づら」の単行本化でこんな弱気な調子の後書きを記す。「この幼い物語が、批評家の剛い手にかかるとなく、ただ少数の人々へのみ愛されんことを」。すべてを見抜いていた友人の小林は朝日新聞紙上で厳しく評した。「何とていふおつおつした手付きで、作者は自分の青春の書を世に送り出しているか。そして、そういう手付きは、この作者一人の手つきではないか」

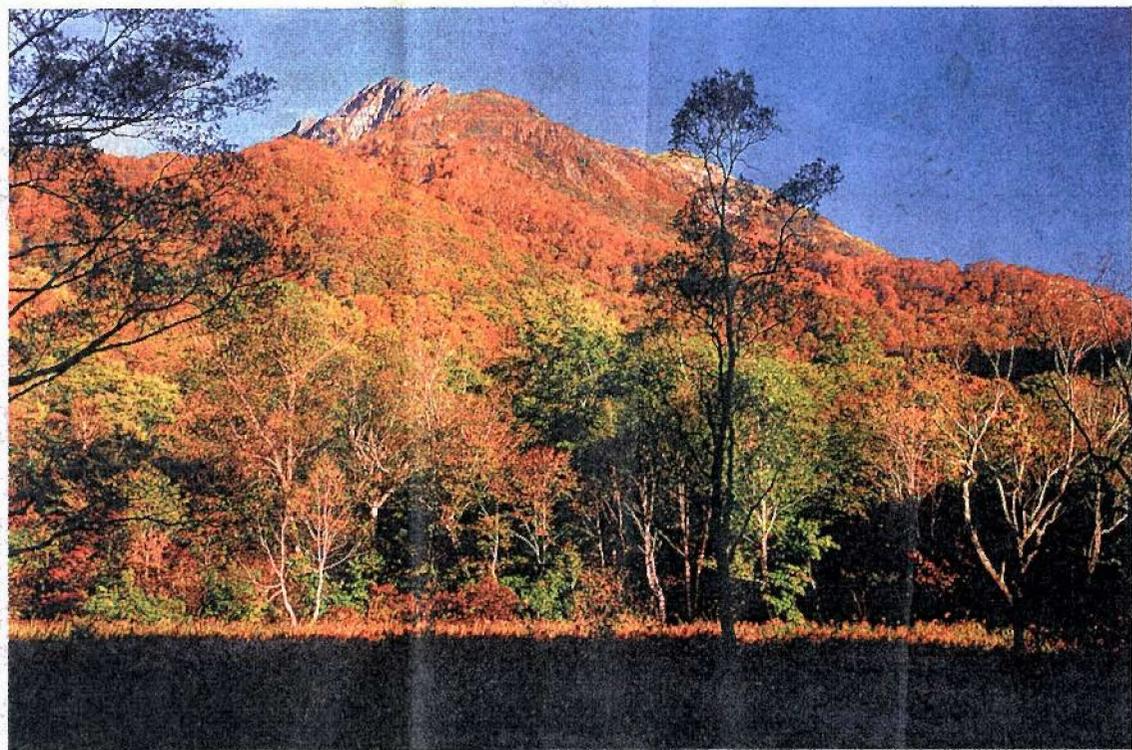
~~~~~

川端康成も看破した。37年、「鎌倉夫人」の朝日新聞への連載が決まった直後のことを八穂は回想している。

「庭から茶の間に入ってこられた川端さんが、『これくらいの連載は、スケッチをするつもりで』と、聞かして下さいました。私は慌てて、『いんど当人に、そうおっしゃって下さいませ』と、頼みました。川端さんは頭を振り、『あなたにどういってば』と

微笑してさっと帰られました」  
八穂との「二人三脚」。『深田久弥 山の文学全集』(朝日新聞社)

の編集委員だった近藤信行・山梨県立文学館長(76)は「深田さんは『津軽の野づら』から『あすなろう』へ、八穂



④ 深田が志げ子と出かけた雨飾山(長野県小谷村)で、全日本山岳写真協会・小沢正

「深田久弥生誕之地」の石柱のある生家=写真上=は、石川県加賀市大聖寺中町にある。車で小松空港から約30分、北陸自動車道加賀インターから10分で、JR大聖寺駅からは徒歩15分。もともと「深田屋」という紙商で印刷業も兼ねていた。1934(昭和9)年の大火で焼けたが、同じたたずまいに建て直されている。



近くの「深田久弥 山の文化館」は、明治に建てられた絹織物工場の建物を改装し、4年前に開館した。深田の著作などを集めた図書室、テントやザック、アイゼンなどゆかりの品々を集めた展示室には、肉声が聞けるテーブルもある。「深田久弥を愛する会」が管理を委託されており、喫茶店も併設されている。入場無料、火曜休館。  
生家と文化館の間の江沼神社には、文学碑がある。「山の麓を顧みて 一つの山を終りけり 何の俘のわが心 早も急かるる次の山」の4行詩の陶板がはめ込まれている。墓があるのは本

ぶらり

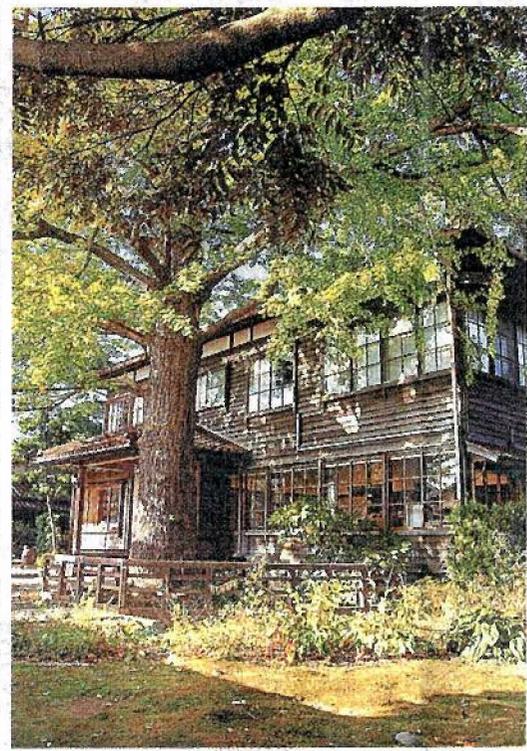
B  
L

B  
L

さんの文体で通している。旧制高校出  
らしくパンカラなどごろもあり、鉄面  
皮と言えはまことに鉄面皮」としなが  
らも、「深田さんは文壇へ出るのに焦  
っていた。八穂さんも、深田さんのた  
めに仕事をした、という部分が見え  
る」と分析する。

AAA

その一方で深田は、41年に志げ子と  
再会した翌月にはもう、山行へ誘う。  
百名山の一つ、新潟・長野県境の雨飾  
山(1963登)。長野側から登ろう  
として雨に降り込められ、ふたりは小  
谷温泉の旅館に4日も滞在する。  
再会から1年余りで男子が生まれ、  
八穂も知るところとなった。夫婦の冷  
戦状態は深田の応召で中断したが、46



正美氏撮影の絹織物工場を改装した「深田久弥 山の文化館」(石川県加賀市)

年に復員した深田は、八穂のいる鎌倉  
へは顔を出した程度で、すぐに志げ子  
が疎開していた新潟・越後湯沢に合流  
した。翌年には八穂と離婚し、志げ子  
と結婚。一家は深田のふるさと石川・  
大聖寺(加賀市)に身を寄せた。  
そのころ八穂は深田との合作につい  
て、鎌倉を人力車で出歩いては、文士  
仲間ですべてぶちまけていたという。  
夫婦でいれは済まされたことが、別  
れたことで表面化し、戦前の名声も打  
ち砕かれた。深田は文壇に背を向け、  
ふるさとでの隠遁生活を強いられる。  
地味な短編を書くが、鳴かず飛ばず。  
「百名山」にこんなくだりもある。  
「戦後私はふるさとに帰って三年半  
の孤独な疎開生活を送ったが、白山は  
どれほど私を慰めてくれたことか」  
金沢に移って4年余りを過ごした後  
の55年、8年間の充電を終えた深田  
は、ついに上京を決意する。「自分に  
は好きな山しか道はない」と山の文学  
者として再生を期すのだ。  
志げ子の献身ぶりは見事だった。長  
男で日経広告研究所顧問の深田森太郎

さん(64)によると、当初こそ「私と一  
緒になってからちっともいいものを書  
いてくれない」と嘆いた。「志は高  
く、暮らしは低く」が深田のモットー  
で、稼ぎは本や資料代に消える。志げ  
子は丸善から請求書が届くたびに「こ  
わいこわい」と言いながら開封した  
が、深田が頼んだ洋書が入荷したと聞  
けばたとえ重くても抱えて帰り「また  
これを使って稼いでね」と励ました。  
新潮社の編集者だった佐野英夫さん  
(84)によると、百名山の単行本化を持  
ちかけてから間もなく、「そんな話は  
簡単にはいかないから信用するなよと  
弟(中村光夫)が言うんです」と志げ  
子は笑っていたという。

AAA

「山と高原」に59年から連載された  
「日本百名山」が本になり、64年の東  
京五輪のさなかに出版記念会も開かれ  
た。同席した志げ子の感慨が「『日本  
百名山』余話」でつづられている。

「内助の功?とやらで私にも出るよ  
ろにこの有難い恩召。晴がましい席へ  
急ぐ私の胸には多少の感慨があった」  
深田は71年の春分の日、登山中に脳  
卒中で急死。志げ子は7年後、交通事  
故に遭ったのがきっかけで死去した。  
八穂は離婚後、児童文学者として活  
躍。健康に恵まれなかった八穂が、78  
歳と3人の中で最も長生きをした。  
偶然の再会が、山の文学者・深田久  
弥と児童文学者・北畠八穂を生んだ、  
と見ることもできる。



光寺。白山を  
望む丘に据え  
られた墓石に  
は「読み 歩  
き 書いた」。  
場所は離れて  
いるが、加賀  
市中央公園の  
「ふるさと人  
物ロード」にレリーフもある。(写真  
下は、書齋での晩年の深田)

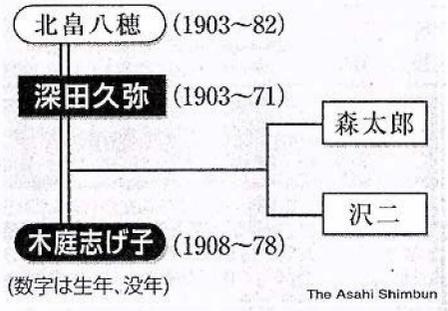


「日本百名山」(新潮社)  
は10万部近く読まれた。新  
潮文庫版は42万部余りで、  
中高年向けに活字を大きくした新装版  
も8万部以上。合わせて60万部を超え  
るロングセラーだ。評伝には田澤拓也  
「百名山の人」(角川文庫など)や安  
宅夏夫『『日本百名山』の背景』(集英  
社新書)、高辻謙輔「日本百名山と深  
田久弥」(白山書房)がある。

## 読む

## 読者のおみやげ

「山の文化館」で  
買った「山の苗を顧  
みて……」の色紙と  
紙商・深田屋が久弥の生年に出した多色刷り  
の引札(宣伝チラシ)のコピーをセットで10  
人に差し上げます。住所・氏名・年齢と「11  
月25日」を明記し、はがきで〒119-0378京橋  
郵便局留め朝日新聞be「愛の旅人」係へお  
送りください。30日の消印まで有効です。



も、もうすぐだ。岐阜卓側上空で、本社へりから



# 深田久弥と志げ子

**ふたり** 深田久弥は1903(明治36)年、石川県大聖寺町(現加賀市)生まれ。小学生のころから「食事の時くらい本を伏せる」としかられるほどの本好きで、福井中学在学当時には30冊余りを歩いて帰省した健脚でもあった。東京帝大文学部哲学科在学中から改造社編集部。懸賞小説の下読みをしていて応募者の北畠八穂(本名・美代)に興味を抱き、「私流の結婚」と呼んだ同居が始まって間もなく「津軽の野づら」で文壇デビュー。結婚に反対だった父の死もあって、40(昭和15)年に正式に結婚する。

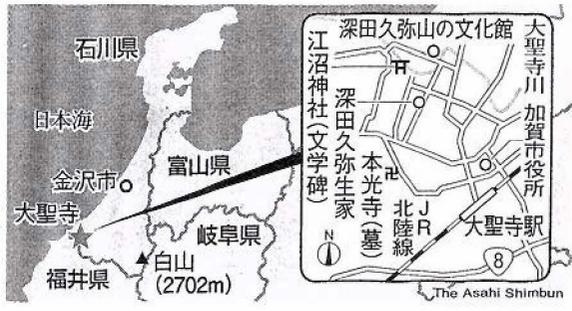
木庭志げ子は一高生当時の深田が通学路であこがれた「マドンナ」。再会して間もなく愛し合うようになり、長男・森太郎が生まれる。



八穂は戦後、「十二才の半年」などで作家として注目され、児童文学者として「鬼を飼うゴロ」(野間児童文芸賞)などの作品を残した。

深田は東京帝大在学中の27(昭和2)年、24歳で改造社に採用された。翌年、懸賞小説に応募してきた北畠八穂という女性に心ひかれる。青森市生まれの八穂は青森高女から実践女学校(現実女子大)を中退。青森県内で代用教員をしていたが、脊椎カリエスが悪化して退職し、自宅でふせっていた。深田が手紙を出して青森まで会いに行ったのをきっかけに、11年間の同居生活の末、40年に正式に結婚する。深田の初恋は、20歳の時だった。ある秋の日、一高生の深田は東京・本郷通りで、聡明そうな少女に目をとめ

れるこの山を思い切つて登ってみた。午前7時20分、南麓の別当出合(石川県白山市)。「霊峰白山登拝道」とある標柱わきの鳥居をくぐって出発した。室堂平に出ると、宿泊棟は2週間前に営業を終え、既に冬支度。道理で下りてくる人には出会わなかった。登り始めて3時間半、最高峰の御前峰(2702m)に立つことができた。近年の登山ブーム、特に中高年が山を目指す背景に、1964(昭和39)年出版の「日本百名山」(新潮社)がある。深田がすべて頂を極めた山の中からえりすぐった白山だ。選定基準は「品格」「歴史」「個性」。「山高きをもって尊しとせずだが」と断りながら、標高1500以上も一応の基準とする。一山につき原稿用紙5枚、それ以上は「だれるから」と嫌った——簡にして要を得た山岳随想を集めた古典的名著である。



運命のいたずらのような再会は、18年後の41年——深田がようやく八穂と結婚した翌年のことだった。文芸評論家の中村光夫(本名・木庭二郎)の結婚披露宴の席。かの女学生の名前は木庭志げ子といい、中村の姉だったのである。深田は、志げ子と初めて言葉を交わしたこの時のことを、「わが青春記」(52年)で「高時代の私の風貌を彼女は細かな点までおぼえていた。まことにこの世は偶然なものである」と回想し、こう記している。「この偶然が私の後半生を支配するようになる」とは——

文・小西淳一  
写真・永曾康仁